

小児期の病気や症状 1

乳児期 新生児はお母さんからの胎盤を通して受け継いだ免疫が残っているため、大半の感染症などにはかかりません。

3～4ヶ月ごろになると病気が見られるようになります。

① **驚口瘡**・・・頬の内側や上顎、舌などに白い斑点がつかます。これはカンジダというカビが生えたためです。

② **上皮真珠**・・・生後2～3ヶ月頃から、歯ぐきに白い真珠のようなものが見られます。これは歯肉の皮が変形したもので、自然に治ります。

③ **夜泣き**・・・生後3～4ヶ月ごろからみられますが、1歳半を過ぎるとほとんどなくなってきました。

④ **突発性発疹症**・・・生後4～5ヶ月から1歳くらいに、突然高い熱を出して3～4日続きます。はじめての熱であることが多く、熱が下がると同時に、身体にブツブツが出てきます。ウイルスによる病気。

⑤ **ウイルス感染症（細気管支炎）**・・・最初は鼻水や咳が出るので風邪と間違えやすいが、しだいに喘息のようにゼイゼイ、ヒューヒューいったり高熱も出ることがある。

⑥ **赤ちゃんの目やに（鼻涙管閉塞）**・・・生まれて数日から数週の赤ちゃんが涙目や目やにが続くことがあります。これは涙が鼻に流れ出すための排水管（鼻涙管）の通りが悪くて起こる。1歳までに90%は自然によくなります。生まれつき塞がっている場合は眼科で管を通すこともある。

⑦ **尿路感染症**・・・尿の通り道（尿路）のうち、腎盂に感染が起こった場合を腎盂腎炎、膀胱に感染が起こった場合を膀胱炎といいます。この二つを合わせて尿路感染症といいます。

最近のトピックス

揺さぶられっこ症候群

あやすためにゆっくり揺らす程度なら問題ありませんが、両方の脇の下を抱えて激しく揺さぶると、脳の損傷や脳出血が起こり危険です。『揺さぶられっこ症候群』は1974年にアメリカで最初に報告され、その統計によると、揺さぶられたことが原因で脳内出血した赤ちゃんの死亡率は25～50%、後遺症が残る確率も30～50%にのぼります。

赤ちゃんの脳は、頭蓋骨より小さくできているため、頭を揺さぶることで脳が大きく動いてしまい、脳と頭蓋骨を結ぶ静脈が切れてしまうのです。けいれん以外に目立った症状がないため、CTスキャンを撮らなければ脳内出血とはわかりません。

強く揺さぶってはいけない年齢の目安は1歳半くらいまでで、繰り返し強く揺さぶらないかぎり、そう心配することはありません。

